

教育実習レポート

[市立 K 中学校 社会] 氏名 : K. Y

私の教育実習は、想像以上に厳しいものだった。私は教育実習に向けての授業研究や中学生への認識を深める機会が十分にとれないまま、O 県の公立中学校での実習を開始することになってしまった。

先生方や生徒達と溶け込むためには「あいさつ」で見せる第一印象が最も重要だと考えていたのだが、私は初めての「あいさつ」で声が小さいことを指摘されてしまった。その結果おとなしい実習生だと認識され、実習の最初の方の期間は担当教員以外の先生方とは接することが少ないまま過ごしてしまった。そこで私は授業や生徒指導、教育の意味、教員の仕事について深く考え、自分なりの意見を持ち、実習校の先生方に積極的に話を伺いに行くように心がけた。そうすることで、担当教員以外の先生方との交流も増え、現場の状況や、生徒が抱える様々な問題についての貴重な話を聞くことができた。その後の実習期間では、生徒との関わり方や教師の役割というものを意識し過ごすことができた。また、生徒への授業のはじめの「あいさつ」は進路や私が大学で学んでいることを取り扱ったが、生徒の反応がほとんどないことに驚いた。違うクラスでも「あいさつ」をする機会があったため、内容を変え、私の中学生時代についてエピソードに変え、生徒にとって「身近な先生」をイメージさせるよう「あいさつ」することで、生徒から積極的に話しかけてきてくれるようになった。このように生徒への「あいさつ」は生徒の様子、状況を踏まえ、内容や生徒に伝わる自分のイメージを工夫し、「あいさつ」することで、生徒の反応が変わることが分かった。「あいさつ」を通して、相手に伝わる印象との重要性を理解できた。

また、教科指導において最も重要だと考えるのは生徒を惹きつける方法を探ることだと考える。大学での模擬授業では生徒観を具体的にイメージできないまま、内容把握と答えられる程度の発問をしていた。大学生を相手にしているため容易いものだった。しかし、相手が中学生になると大学生のような予備知識がないため、授業の構成も異なる。そのため私がまず授業で気をつけたのは言葉遣いだった。難しい言い回しを避けるとともに、用語を理解させるときに漢字を分解して、その用語自体が持つ意味の理解からはじめ、定着を図るようにした。なぜなら、何を話しているか理解できないときや漢字の用語を見るだけでその漢字の指す内容のイメージが把握できていないときに生徒が最もやる気をなくしてしまうと考えたからだ。また、社会科を苦手とする生徒は用語の暗記ばかりの単調な教科だと捉えがちであった。そこで授業内容の中で頻出する重要な用語を絞り、それらを使って 2~3 行程度の文章で用語をまとめるという活動を取り入れた。用語を絞ることでポイントを分かりやすくし、関連した資料や内容からその用語の理解を助ける小話を取り入れ、更にその用語に対する生徒の考えを引き出すためのワークシートを作り、時

間配分も長く設けた。それにより、生徒の用語理解が深まったと思う。一方、授業時間内で終らないことや、多くの事項を授業内で扱えていないこともあり、私の今後の課題としたい。

自分の担当授業の中に特別活動はなかったが、体育祭の練習を見学させていただき発見したことがあった。勉強が苦手な、普段は先生方に注意を受けることの多い生徒がクラスをまとめ、楽しそうに活動していた。学年全体で見ても注意事項の多い学年であると感じていたが、上記のような生徒が生き生きと活動し、全体としてのまとまりが見られた。この他にも部活動では、教室で見せないような真剣な様子を見ることができた。生徒一人一人は全く異なる性質を持つが、それぞれの生徒に活躍の場があり、それを活かした教師の声かけや接し方が生徒の良さを広げていくものになり、さらに充実した学校生活を過ごすことにつながると考える。

最後に、教育実習を経て感じたことは、教師という職業の多忙さとやりがいの両面であった。多忙さを乗り越えて準備を行った結果として、やりがいがついてくるものだと感じた。実際に目の前の多様な生徒を相手にすると準備の時間はいくらあっても足りないが、熱意を持って仕事に取り組むことで、生徒から多くの感動を与えてもらうことができる。そうでないと教師は務まらない職業で、手を抜くことは生徒を甘やかすだけの教師になる。私はこれらを踏まえたうえで、今後の教師としての生き方を考え、生徒を様々な見方から接していき、彼らの力を最大限活かす環境を作るために、働きかけていきたい。また、生徒への仕事に加え、教師間の方針のずれを調整することに苦勞したことから、精神的に強くあり続けることも重要な教師の資質だと考える。